

1年間の分館活動を振り返って

～さまざまな活動の一端を紹介します～

第一区 注連縄作り講習会

分館長 小林 茂夫



第一区分館では、十二月二日(日)に、例年行っている注連縄・注連飾り講習会を開催しました。毎年十二月の第一週をめどに行っています。

今年は大入、子ども合わせて約百三十名に参加していただきました。区民の経験者の方を指導員として、初級・中級・上級と分かれて、ご指導いただきました。わらを区民の方、また知り合いより調達して、約350〜400位の束を用意しました。事前に役員等でわらすきをしておき、あとは個々にわらすきをして、わたらの感触を自分の手のひらで確かめながら、注連飾りを作りました。

指導員の方も高齢化しているため、若い方に引き継いでもらいたいという話もありますが、若い方を指導していただくためにも、先輩方にはまだまだ頑張っていたただかねばと、感じた講習会でした。



第二区 区内施設探訪

分館長 丸山 修司

歴史や文化的な多くの施設を有する二区ですが、区民がそのような施設にあまり訪れていないという声があり、年度はじめの事業として、区内施設探訪を行いました。

最初に訪れた「しもすわ今昔館おいでや」では、展示室やシアターで、飛鳥時代から現代までの下諏訪町や御柱祭の歴史を学びました。

次に「矢の根や」では、専門研究員の小口徹先生より、黒曜石の種類によるニーズの違いについて、同じく「宿場街道資料館」では江戸時代の貴重な資料を見せていただき、宿場町の当時の様子を大変わかりやすく説明していただきました。

高札場跡地と今井邦子文学館も見学し、地元の魅力に改めて触れることができました。



第三区

しめ飾り作り講習会

分館長 諏訪 敏和

今年のしめ飾り作り講習会は、例年お世話になっている小口金吾様・欣彦様（広瀬町）を講師に迎えて、十二月十六日に青雲館で行われました。

講習のテーマは「藁の文化を次代に繋ぎながら、手作りのしめ飾りで正月を迎える準備をしよう」とするもので、第三区分館としては年中行事の一つであります。

初心者やまだ習熟できていない参加者の数組を含めて、約三十名二十五組の参加者を得て、講師から冒頭にしめ飾り作りの基本的な技術についての説明を受け、その後製作実技に取り組みました。



製作の主たるものは玄関飾りで、従来型のものはもちろん、講師から紹介された新型の玄関飾りや輪、神棚飾りを製作する参加者もありました。



第四区

歴史講座事業について

分館長 土田 雅春

平成三十年のお舟祭の御頭郷が下諏訪町で、第四区も下社のお膝元の地区の一つであるため、分館で歴史講座を六月十五日に開催しました。歴史に関心のある幅広い年齢層の男女区民の皆さんに、数多くお集まりいただきました。



歴史講座の内容は、「お舟祭の歴史」として、講師に下諏訪町立博物館・赤彦記念館館長の宮坂清先生をお迎えし、「お舟祭は遷座祭」、「下社の発生と遷座の意味」、「古代からの春と冬」、「旧御射山・春宮・秋宮のトライアングル」、「お舟は本当に舟か」の項目について、様々な方々の考えを分かりやすく解説いただきました。聞き入っていました。質問も活発に多く出され、歴史への関心の深さを再認識しました。今後も講座事業の一つの指針となることと考えます。



第五区

ピッツア作りを楽しむ会と史跡紹介

分館長 長崎 浩

今年度は、子どもから大人まで幅広い年齢層に参加していただける催しを企画しました。諏訪市中洲にてピッツア店（サンタローザ）を営む「滝沢様ご夫妻」を講師に招き、津島神社舞屋内にてピッツアの生地を伸ばし、好みの具材をトッピングし、焼き釜を搭載した車輛を使い、その場で焼いてもらいました。参加者のほとんどが初めての体験で、自分で作ったピッツアの味に満足した様子でした。



史跡紹介は、区内にある史跡を知ってもらい、いつかは区内の史跡めぐりツアーを企画したいという思いでスタートしました。まずはその準備段階として小学生に協力をいただき、「区内史跡紹介ビデオ」の製作に取り組みました。できあがったビデオは高木区文化祭にて上映し、区内の史跡も再認識されたことと思います。小学校にも同じビデオをお届けし、区内の子どもたちの活躍が紹介されたと思います。



第六区 区民ボウリング大会

分館長 小松 正



十月二十一日(日)、

スポーツ岡谷で総勢四十名の参加をいただき、ボウリング大会を開催しました。大人から児童の皆さんまで各レーンに分かれ、自分に合った球を選

んで、最初に練習をやり、その後本番に入りました。各レーンでハイスコアを目指し楽しんでいる区民の皆さんの姿を見ることができました。

交流も深まり、皆さんの笑い声やストライクが出るとレーンの仲間の方々とタッチなどする姿が印象的でした。大会終了後成績発表があり、上位入賞者に景品授与があり、参加者全員に参加賞を配り、皆さんそれぞれ大いに楽しまれたのではないかと思います。そしてボウリング大会が区民の親睦と体力増進につながったのではないかと思います。

これからも大会を区民のスポーツと位置づけ、続けてもらいたい



第七区 熊野神社例大祭前夜祭

分館長 古田 俊彦

秋も深まった十月の最終土曜日、夜、東山田公民館の二階の広間は、多くの方でいっぱいになりました。(約二百八十名) 毎年恒例の熊野神社例大祭前夜祭の開催です。



各団体の皆様に、育成会の歌、とがわ保育園年長さんによるダンス、七区消防委員によるラップ演奏、子ども木遣り、雅楽と様々なジャンルの演目を披露していただきました。また社中学校吹奏楽部に出演いただき、元気の出る曲で手拍子と歌声で会場が一体となって盛り上がりました。



ました。

出演団体の皆様の日々の練習の成果に、子どもからお年寄りまで楽しんでいただけたと思います。抽選会でも多くの方に参加いただき、一喜一憂した楽しいひとときを過ごせ

第八区 区民納涼祭

分館長 渡邊 淳一

社東町では、毎年八月の第一週土曜日に納涼祭を開催しています。今年度は一週間遅くの開催となりましたが、例年と変わりに多くの方々に参加していただきました。

納涼祭は文化部が主体となって企画から運営まで行います。部長中心に、昨年の反省点の改善や公民館メンバーからのアイデアを取り入れながら、区民の皆さんが楽しんでいただけるように新しく企画をしています。

今年度は、区の協力のもと、自作のコンロ作成を、子どもにはスツキリとした飲み物を、男性にはスタミナがつくものを、女性には甘いお酒を新しく用意しました。新しい企画は区民の皆さんに知っていただけるよう、公民館の広報誌に記載して配布しています。

納涼祭の当日には「おいしかったよ、ありがとう」「また来年も、楽しい納涼祭を頼むね」等の声をいただきました。今後も区民の皆さんが多く参加され、良い交流の場となるように、公民館メンバーも楽しく活動していきます。



第九区

新事業に挑んだ2018年

分館長 与曾井 秀治

今年も、三種類の新事業に挑んだ年になりました。それらは、体操（らく楽体操教室）、ボウリング大会の春と冬の二回開催、星が丘旧跡の講演会（仮称・2月予定）の三種類です。



この変化の背景には、やはり高齢化があります。星が丘は下諏訪町でも高齢化が進んでいる地区で、「物より健康」「ハードなスポーツは無理」「知的好奇心」が事業化のポイントになりました。

体操（らく楽体操教室）は、従来行ってきた手芸教室の代わりに婦人部が実施した事業です。

また、ソフトボウルの代わりに、出席者の多いボウリング大会を二回開催としました。どちらも大勢の参加があり、ほっとしました。



また、区の歴史は浅く、旧跡を知らない区民も多いので、町内の有識者に講演をお願いしています。町内の美大生にパンフレットのさし絵を描いていただき、2月に実施予定です。

第十区 区内の史跡巡り

分館長 伊東 康政

今年十区では区民の皆さんに、区の歴史について知ってもらおうと考え、区内の史跡と十区に鎮座される若宮神社について皆で勉強しました。

史跡の勉強会は、六月二十三日の土曜日に、講師の先生のもと、ピクニック形式で行いました。区民の皆様の関心



も高く、小学校低学年から八十代までの出席をいただき、十区の史跡（特に国道より山側）の「庚申の碑」・「力石」・「村の辻」・「伊勢宮社跡」・「六地藏尊」・「若宮神社」・「鎌倉街道」・「一里塚」を楽しく巡りました。途中から雨が降ってきたのが残念でした。



史跡巡りの後、七月十五日には若宮神社について、同神社宮司の宮坂清さんを招き、二時間ほど若宮神社と古事記について講話をしていただきました。約七十名の出席がありました。大変有意義な会となりました。改めて区民の皆さんの関心の高

下諏訪町豆知識：知ってる？下諏訪町にある小字(町)名。

今年度町制125周年を迎えた下諏訪町。町が全部で10区に分かれているのは皆さんご存じだと思いますが、その区を更に細分化する形で、小字名(町名)があります。この町名は、数え方にもよりますが、現在70以上もあります。町制施行以来変わらない町がある一方で、様々な事由で統廃合された町もあります。お隣の区にはどんな町があるか、調べてみるのも一興ですね。ちなみに、今回は町制施行以来存在する1区、2区の町名を挙げてみたいと思います。

第1区：東町(上・中1・中2・下)、仲町、大門(1~3)、田中町、矢木町(1~3)、桜町、緑町。第2区：立町(1部・2部)、小湯の上(1部・2部)、横町木の下、湯田町、湯田仲町、新町(上・下)、御田町、塚田町。※町の小字(町)名は、これからも随時掲載していきます。

投稿

大変ということ



富士見町 高木 萬知江

らぬこととも考えられます。

けれども一方で会の活動はそのひとつひとつに意味があり、長い間に淘汰された大切なものが残っています。また会の持つ社会性の観点からは、地域や行政との関わりの中で簡単に無くせないものも多く、私はそれでも大変と取らず、むしろできるだけ応えて協力することが必要とさえ思うようになります。結局なんとか継続してゆくには、周りを受容しつつ協調してゆくしかありません。

それに視点を変えれば、この「大病」には新たな出会いがあり、学習があり、役得があり、むしろ楽しいことの方が多いのです。

本当の大きさは、この大きなうねりの中で、多くの異なった意見を汲み取りまとめてゆくと、会の現状を知り先を見据えて、その時がいつかを見極めることではないかと思えます。

人間一人では生きられないし、地域社会からさまざまな恩恵を受けていて、公助、協助、自助という言葉もあります。ともか

時代の流れという言葉とともに、今いくつかの団体が衰退や解散の危機を迎えているといい、その原因や多くの関係者に思いを馳せるこの頃です。

私の属する古い団体も、試行錯誤を繰り返した中で、旧役員の登場や兼任で何とか命脈を保っています。今回たまたま重ねてこの職責を担うことになったのは、継続か解散かの究極の選択を迫られた時、自分が負うことで少しでも会を繋ぐことができるとしたら、誰かが抱える中で、高齢化や病気など多くの人が本当に大変で、それも実際無理か

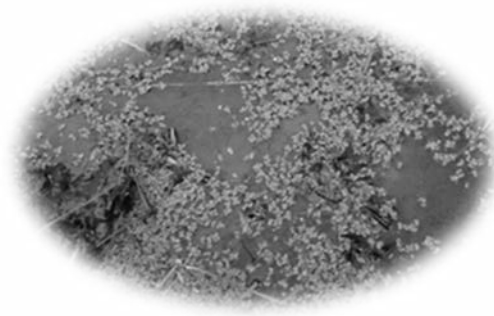
く今は会が存在し仲間がいるという事実を大切に考えて、自分のできることを地道に実行してゆくほかありません。

昔話の浦島太郎は玉手箱を開け白髪になっておしまい：けれどこの私はその責任や愛着から白髪になっても、只々今を精一杯生きてゆくのみなのです。

まとめるの

意味いくたびか反芻す

人の心の 定かならずに



水、ぬるむ



町立図書館のおすすめ本コーナー



『岡谷製糸王国記 信州の寒村に起きた奇跡』

市川一雄 著 あぞみ書房

製糸業で糸を取る人を女工と呼んではいませんか。本来は工女と呼ばれていました。しかし、「女工哀史」「あゝ野麦峠」がベストセラーになる中で女工という名がひろまり、同時に厳しい労働条件の下で資本家に搾取される可哀そうな少女たちというイメージがこの言葉に付きまとうようになります。しかし、本当にそうだったのでしょうか。本書は岡谷製糸の歴史を体系的にまとめる中で、工女の果たした役割の大きさを示し、工女は自分の仕事に誇りを持っており、家族経営の工場主は技術を持った工女を大切にした事例をたくさん紹介しています。

また、本書で紹介されているシャルル・サンドラ氏の論文「『女工哀史』言説についてのもう一つの視点：戦前日本における女性製糸労働者の生活世界」はインターネットでも読むことができ、インターネット環境をお持ちでない方は図書館で見ることができます。図書館には前出の「女工哀史」「あゝ野麦峠」も所蔵しており、借りることができますので、読み比べてみることをおすすめします。本は書かれた時代の制約を受けて生み出されます。そして、時間の検証を受けながら新たな歴史的視点を育み、新しい見地の本を誕生させます。

参考文献：「女工哀史」 細井和喜蔵 著 岩波書店



LINE

うぐいすが 鳴いて桜の 開くころ

待てずに走る 和菓子のお舗

「うぐいす餅 さくら餅ひとつずつ包んでいた
だけですか」

「ハイ?・・・(気の毒に。この男の人一緒に
食べてくれる女性もいないのかしらね) おひとつ
ずつですよね?」

「今訳あって単身この地にいるんですよ」

相手の訝しげな脳内活動を感じし、苦しまぎれ
に先手を打つ。

そうそう、うぐいす餅は、一足、ふた足はやく
店に出て、あつという間になくなるから、店に入
る前にあるかどうか確かめること。両方揃わない
と、ささやかな「儀式」が始まらない。体全体で
春の到来を感じるといふ。

あんものに目がない。少年時代はあんみつ若と
呼ばれ、長じては「男の」おばさんとなる。(誤
解されると嫌なので一言。酒も大好き、で強い)
高冷の地諏訪では、鶯が鳴き、桜が咲き始める
のは四月下旬。待てないではないか。一時もはや
く旬を感じたくて和菓子屋さんに行く。店内には
季節の風雅というものが充満している。本当は五
個ずつ買って食べたい。

職人さんが、食べる人の身になって作ってくれ
るぬくもりがうぐいす餅、さくら餅の中に込めら
れている。残念ながら作今、和菓子屋さんもめつ
きり少なくなり、淡い切なさを覚える。

(植松 昌弘)